

【評価報告書】

学校法人 牛津ルーテル学園

幼保連携型認定こども園牛津ルーテルこども園

認定こども園第三者評価結果報告書

報告内容	公表／非公表	ページ
運営法人情報	公表	P1
理念・基本方針		
施設の特徴的な取り組み		
第三者評価結果の総評		P2
第三者評価結果		P3～P 14
第三者評価確認書類リスト	非公表	P15～P17
公開保育への取り組みの様子（写真）	非公表	P18
第三者評価結果（詳細）	非公表	P19～P34

(一財) 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

【運営法人情報】

施設名称	牛津ルーテルこども園
運営法人名称	学校法人牛津ルーテル学園
施設種別	幼保連携型認定こども園
代表者氏名	理事長 岩切雄太
施設所在地	佐賀県小城市牛津町牛津 664
電話番号	0952-66-0347
FAX番号	0952-66-5022
ホームページアドレス	http://park18.wakwak.com/~ushiduyoutien.hp/
メールアドレス	ushiduluther@cc.wakwak.com
事業開始年月日	1954年4月1日
教職員・従業員数	32名
施設・設備の概要	鉄骨造 1階建て 敷地全体面積 3841 m ² 園舎延べ面積 1328.09 m ² 園庭面積 820 m ²

【理念・基本方針】

《教育・保育方針》教育・保育要領に則り、キリスト教精神に基づいた教育及び保育を行う。人間は神の前では皆平等であり、一人ひとりがかけがいのない存在であるが故に、互いに愛し合い助け合ってゆかねばならない。乳幼児期の子どもにとって一番必要なことは、人間らしい生き方の基礎と人間としての力の基礎を培うことである。

《目標》生涯にわたる人格形成の基礎を培う大切な乳幼児期に、神さまの大きな愛に包まれた園で、保育者や友だちに愛されていることを感じながら、安心していきいきとした園生活を送る。

【施設の特徴的な取り組み】

《育児担当制と流れる日課》いつも同じ保育者が食事や排せつ、着脱などのお世話をすることで、担当保育者との信頼関係が深まり良好な人間関係を築いていきます。また、こども一人ひとりの生活リズムを大切にし、子どもの行為（遊び、排泄、食事、睡眠）が中断されず一日を過ごせるよう日課を整えることで、子どもの主体性を伸ばし自信へと繋がります。

《異年齢保育》年少の子どもたちは年上の子どもたちを手本とし、1・2年後の自分の姿に見通しを持ち主体的に取り組みます。また、年長の子どもたちは年下の子どもたちにわかりやすく教え、手伝うことで自分の行為がより丁寧になります。年下の子を助けることで人を思いやる心が育ち、自信となり自己肯定感に繋がります。道徳観や自分を律する力が芽生え、社会性が育つと考えます。こうして人と関わりながら生活する中で「生きていく力」を身につけます。

【評価機関情報】

評価機関名	(一財)全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
評価実施期間	令和5年2月8日
評価者	H29A00844, R04B01046
公開保育コーディネーター・支援者	EH27410172, EH27410171, EH30410315, EH29410255, EH25440051, EH26420112

【総評】

●総合評価

評価〔 A 〕

学校法人としての経営管理体制を万全にしつつ、キリスト教を基盤とした教育・保育理念の下、教職員が一体となって、日々その質向上のための積み重ねをしてきていることが感じられた。中でも 0～2 歳児クラスにおいては育児担当制により家庭と連携しながら愛着形成に寄与し、3～5 歳児クラスは異年齢保育を行い、子どもが自己肯定感を育むと同時に、社会性、自立性の形成のための援助を行っている。試行錯誤しながらのこれまでの取り組みが、地域の中でも厚い信頼を獲得しているものと思われる。

●特に評価が高い点、園の良さ等

3 歳児以上の子どもたちの育ちには縦割り保育や、0 歳児から遊びから遊びへという保育環境が適切だとの方針を掲げ、クラス運営やチーム保育が展開されていた。すべての保育教諭や事務職員も保育方針を理解し保育が展開されていた。また、クラス固定のチーム保育が展開され、縦割り保育での子どもたちの発達の理解や、特別な支援が必要な子どもの援助も自然な形で補助ができていて教職員も子どもたちも、一人一人の子どもたちを尊重し生活を共にしているという保育環境がある。園舎も保育実践を行う上で保育者の意見を取り入れ、園の方針に合致した園舎であったことが評価の高い点として挙げられる。

●課題、改善を求められる点

とても良い環境で子どもたちが生活していることが理解できた。クラスも広く設計され、生活と遊びから課業へと続くためのコーナーも充実し、遊びを中断させることのない保育展開が考えられている。課業と遊びがリンクされており、子どもたちの生活がクラス遊びから戸外遊びと、それぞれ時間が決められているので、戸外遊びを含めた子どもたちの主体的な学びをどのように捉え課業に取り入れていくのかを期待したい。

新型コロナウイルスで子育て支援事業や地域交流の機会が減っていると話があった。新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」を見据え、地域の乳幼児教育保育の拠点として、牛津ルーテルこども園の教育保育力を発信していければ、地域の教育保育力の向上につながると考える。

●第三者評価結果に対する法人・施設のコメント

幼稚園から認定こども園になり、保育の在り方に疑問を持ち、悩んだ日々もあったが、職員全員で「保育」について懸命に学び続けてきた。その結果「育児担当制と流れる日課」「異年齢保育」にたどり着き、新園舎建築にまで至った。今回自分たちが目指して進んできた保育や環境に対して、このように高い評価をしていただいたことは職員一同の励みとなり、より一層学びを深めていく力となった。今後も職員一同力を合わせて、自分たちが目指す保育と目の前にいる子どもたちに対して真摯に向き合っていきたいと強く思った。

第三者評価結果

I 保育の公開に伴う保育のプロセス評価

1. 事前訪問時に抽出された自覚的な良さや課題

子どもたちの生活が自然に流れるよう縦割り保育を実施し、担当制と流れる日課のカリキュラム・マネジメントを実践していく中で、園舎が縦割り保育を行う機能を有していないことから新園舎への改築・移転を実施している。新園舎には担当制と流れる日課のカリキュラム・マネジメントを実践するにあたっての機能が詰まっており、園舎の課題は解消されていたが、園庭環境にはまだ課題があると聞くことができた。縦割りならではの環境構成や保育方法などの課題に向き合い、日々実践している。

教職員からの課題として、子ども主体の保育をする良さがある反面、課業の取り組み方において学ぶべきことが多い。発達に課題のある子どもへの対応が難しい。環境面では、遊具や玩具の種類や数が充実している反面、それらの補修や清掃に十分な時間が取りにくい。未満児クラスにおいては乳幼児期の発達についての学びを深める必要があるという課題もあげられていた。

2. ①公開保育実施時の課題等

「時間帯によっては、子ども一人一人とゆっくり関われないことがある」「以上児クラスと未満児クラスとの交流が難しい」「環境整備や清掃などに十分な時間を取れないこともある」「課業について学びを深めていく必要がある」「乳幼児期の発達についてもっと学びを深めたい」等、保育者のかかわりや環境づくり、援助や配慮についてといった課題が挙げられた。

②公開保育後のカンファレンスにおける外部から見た良さや課題

未満児では、教室の雰囲気や教師のかかわり、遊具や玩具については高評価であった。課題としては環境構成の変化や、月齢に合わせた環境や遊びの工夫が挙げられていた。低年齢は手が出るため過保護になるが、遊びを阻害しないような保育者の見守りなども課題とし、カンファレンスができたようである。以上児では、保育担当制の良さが挙げられていた。特に担当する保育者がクラスの子どもたちの年齢発達や特性を理解していることで、保育者同士のアイコンタクトや役割分担ができていているという良さの気付きが挙げられていた。課題として欠席者が多く普段の様子が見られなかったことが一番に挙げられていた。縦割り保育の安全面の課題として、3・4・5歳児での集中時間の違いや、危険だが便利な道具の出し方などの工夫についてなどが保育面での課題となっていた。また、子どもの主体的な遊びを尊重していることで、課業と遊びのつながりや参加しないことの関りも課題として挙げられていた。

3. 事後の園内研修において整理された良さや課題ならびに課題解決の方策

子どもに対する教育理念を公開したことで、牛津ルーテルこども園の良さや課題を再認識できたのではないかと。特に縦割り保育の教育方針は、すべての教職員が理解し学びを深め実践していたが、さらに今回の公開保育で整理され課題等も明確になったのではないかと。牛津ルーテルこども園の理念や教育方針を実践していくために、園の設計・改築移転、新園舎での保育内容の見直し等、教職員が一丸となって子どもたちの育ちに必要なることを追求していく姿勢はとて感銘を受けた。今後もこれからの教育課題を見据え、教職員間で課題を共有し、保育実践していく再認識の一助になったのではないかと。

Ⅱ. ヒアリング等・書面等による評価

< A 教育・保育 >

① 子供の人権、安全と健康

	調査項目	確認結果
1	一人一人の子供の家庭環境や人種、文化等の違いを知り、異なる意見や価値観を認めあう心を育てよう努めている。	済・未
2	子供や保護者、同僚を傷つけるような差別的な言葉や態度をしていない。	済・未
3	身体、性、年齢、発達の差等、生来的な差によって子供に不当な不利益を与えるような言動やシステムがない。	済・未
4	園庭の環境（空間と遊具）や室内の環境（家具や動線）の安全性を、保育の中で注意・改善する視点がある。	済・未
5	子供の成長や食べる意欲が大事にされた食育（食べることの全ての営み）がなされている。	済・未
6	園生活に必要な一つ一つの生活習慣が、先生と子供に、共に大切に扱われている。	済・未
7	全ての子供が「いる」だけで認められる、心理的な安全・安心が子供集団（学級）のなかにある。	済・未
8	園生活の中で、大切にしたい信心（特定の宗教を含む）が自然と保育に融けこみ、子供たちに愛情や感謝の気持ちが育っている。	済・未
<p>(コメント)</p> <p>縦割り保育が実施され異年齢の子どもたちが環境を通して接していた。子どもたちが自分の考えや発見を伝え合う様子が見られた。保育者同士のアイコンタクトなども見られ、保育者同士が尊重していることが見受けられた。保育の場面でも、子どもの気持ちや思いを聞き取る態度が保育者に身につけていることが確認された。</p>		

②保育者の資質向上・研修

	調査項目	確認結果
1	豊かな人間性を備えた保育者になることを、園として大切に考え支援している。	済・未
2	保育者の資質向上のためには、遊びと生活の専門性を高めることが必要であるという共通理解のもとに、教育・保育が行われている。	済・未
3	自園の教育・保育理念を十分に理解し、日々の実践に活かしている。	済・未
4	公開保育を通して、教育・保育の質を高める取組ができている。	済・未
5	職場における同僚性の向上を意識し、保育者集団としての力量を高めようとしている。	済・未
6	教職員一人一人が社会人としての自覚をもち、その役割を果たすことができるように、組織的な取組をしている。	済・未
7	子供と関わることを喜び、子供の遊びが豊かに展開されるような教育・保育をしている。	済・未
8	教職員一人一人が向上心を持って、研修など様々な学びの機会を得ようとする風土が園としてできている。	済・未
<p>(コメント)</p> <p>日常的に、互いの実践を見合う機会があり、それをもとに保育者同士が語り合う等、園内研修の場が確保されている。園の研修の記録から外部の研修にも積極的に参加し、研修報告を園内研修で実施していることが確認された。公開保育のカンファレンスにもおいても今までの育ちや今後の課題を積極的に発言する姿が確認された。</p>		

③ 子供理解・指導の計画等・環境・実践・記録振り返り

1) 子供理解

	調査項目	確認結果
1	乳幼児期の発達の過程を踏まえながら、一人一人の子供の内面的な心情や意欲をくみ取り、様々な力を培っている姿を教職員全体が理解しようとする風土を持っている。	済・未
2	子供の姿や育ち、実践について様々な手法（日誌、環境図、エピソード、写真、動画等）を用いて記録し、一人一人の子供理解に努めている。	済・未
3	子供の記録を園内での振り返りや園内研修等に活用し、子供理解の共有を教職員間で図り、必要な援助を考え環境の構成を見直すなど、保育の計画に活用している。	済・未
4	遊びや活動の意味についてそれが子供の成長とどう関連しているのか？記録を通じて理解し、実践に繋げようとしている。	済・未
5	園での子供の育ちを保護者と共有しようと心掛け、家庭環境や家庭での育ちの状況も考慮しながら、子供理解の幅を広げようと努めている。	済・未
6	特別な配慮を必要とする子供一人一人の理解に努め、その子に応じた個別の指導計画を作成し、必要な援助を組織的、計画的に実践につなげている。	済・未
7	特別な配慮を必要とする子供の家庭や専門機関、小学校等とも連携しながら、家庭支援や引継ぎ等における特別支援教育の幅広い環境整備を心掛け、多面的なアプローチで子供理解を図っている。	済・未
<p>(コメント)</p> <p>様々な記録により子どもを多面的に理解するように努めていることが確認された。保護者に子どもの成長の記録や育ちを動画で記録し、ICTでの動画配信や、掲示やお便りお手紙等でも知らせ、家庭と園との連携を図っていた。特別な配慮を必要とする子どもについても、家庭との連携や専門機関との連携が密にできていることも確認でき、療育を必要とする保護者へのアプローチも図られていた。</p>		

2) 教育・保育の計画

	調査項目	確認結果
1	幼稚園ないし幼保連携型認定こども園の全体的な計画における教育課程と指導計画は、子供の発達の姿から、自園の教育・保育理念と、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に即して作成している。	済・未
2	子供の発達の過程や発達の連続性を見据え、各園の教育・保育の理念や目標に基づいた保育計画によって実践を展開するために月案や週案等を作成して、実践につなげている。	済・未

3	日々の実践を振り返り評価し、明日の実践に反映し、教育・保育の質が向上するように計画を見直している。	済・未
4	個別に対応する必要がある場合については、個別の指導計画を作成している。	済・未
5	保護者の理解と支援の下に実践ができるように幼稚園ないし幼保連携型認定こども園の全体的な計画における教育課程は、保護者等に開示されている。	済・未
6	幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の理解が深まる仕組みがある。	済・未
7	計画は実践につながりながら、気候やその日の子供の状態等に即して柔軟な対応がなされている。	済・未
<p>(コメント)</p> <p>教育課程と指導計画は、牛津ルーテルこども園の教育・保育理念と幼保連携型認定こども園教育・保育要領等に即して作成されている。月・週日案等で遊びから遊びへという教育保育計画の中で計画されたことは、振り返りを基に実践へとつながっていることが確認された。0・1・2歳児の未満児の保育者と3・4・5歳児と教職員との子どもの育ちの交流もできていることが確認できた。</p>		

3) 環境の構成

	調査項目	確認結果
1	<園舎等の空間>子供たちが遊び込むことができる時間の配慮、自由な遊びコーナーなど、子供の自主性・自発性を尊重すると共に、子供同士の関わりや遊びが豊かに行われる空間環境が工夫されている。	済・未
2	<遊具・家具・絵本・廃材などについて>子供の成長に合わせた遊具や絵本が、子供の手の届く場所に適切な量で用意され、子供が自由に選び、興味をもって関わり、考えたり、試したりして工夫して遊びを展開できるよう配慮されている。	済・未
3	<園庭について>外気に触れ、自然を感じ、興味を持って自ら移動、探索する楽しさを存分に味わい、体を動かす楽しさを味わうことができ、かつ、子供が安心して遊べる安全面に配慮された園庭等が確保されている。	済・未
4	<動植物の飼育、栽培について>身近な動植物に親しみを持って接し、飼育や栽培を経験することで生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする環境が確保されている。	済・未
5	<リズム・造形等の表現活動などについて>リズム・造形等の多様な表現活動を経験でき、自ら興味を持って関わり楽しめる工夫や継続して活動できるような環境の構成がされている。	済・未

6	<数量・図形・文字標識などの環境について>数量や図形、文字や標識に自然に触れ合えるような環境が工夫されている。	済・未
7	<衛生管理について>施設内の清掃が行き届いており、保育室・トイレ等の清潔が保たれ、子供たちが使用する備品類の消毒が行われている。また、自分の健康に関心が持てる工夫や、病気予防のための配慮がされている。	済・未
8	<メンテナンスについて>手洗い場や机・椅子等、子供の身体にあった大きさを整えられ修繕されている。	済・未
<p>(コメント)</p> <p>屋外には四季を感じられる植栽や子どもの遊びに合わせた園庭環境があり、子どもたちが興味や関心を持ちイメージを広げて遊んでいた。園の周囲には田畑があり植物の成長や収穫の様子などを間近で観察できる環境がある。近隣田畑を無償で借り、園庭ではできない体験を十分に経験できる環境が整っていた。屋内遊びでは「課業」という設定を行い、遊びから学び遊びに戻る教育保育を設定し、年間を通して学びあえる環境を準備していることが確認できた。数量や文字標識等に触れる環境や、子どもたちが手に取り落ちていて読める十分な量の絵本が揃えられ、豊かな環境となっていることも確認できた。</p>		

4) 実践

	調査項目	確認結果
1	乳幼児期にふさわしい生活が展開されている。 (1)子供が保育者を信頼し、自分が受け入れられ見守られているという安心感を持って生活できるような配慮をしている。 (2)興味や関心に基づいた直接的、具体的な体験の積み重ねを大切にされた教育・保育が行われている。 (3)子供が友達と十分にかかわって生活できるような配慮をしている。 (4)子供の発達の過程に応じて、適切な運動と休息をとることができるようにしている。 (5)在園時間の異なる子供が落ち着いて過ごせるような配慮をしている。	済・未
2	子供の生活や遊びが豊かに展開されるよう工夫している。 (1)子供が主体的に、遊び込める時間と空間を保障している。 (2)子供が自分の目的を持って、考えたり、試したり、工夫したりする過程を大切にしている。 (3)子供の主体的な活動を促すために、保育者が多様な関わりを持ち、様々な役割を果たすように努めている。 (4)子供が周囲の自然に親しみを持ち、それらを生活や遊びに取り入れたり、生命を大切にすることが養われたりするような援助をしている。 (5)子供の発達の過程に応じて、協同して遊ぶ活動を取り入れ、友達同士が互いの存在を認め合い、一緒に遊ぶ楽しさや喜びが味わえるような援助をしている。	済・未
3	遊びを通した総合的な指導を行っている。 (1)子供が主体的に環境にかかわって遊びを展開する中で、心身の発達にとって必要な経験が相互に関わりながら積み重ねられている。 (2)子供が発達していく姿を様々な側面から総合的に捉え、指導している。	済・未

4	<p>子供一人一人の特性や発達過程に応じた指導をしている。</p> <p>(1)子供一人一人の発達過程や生活環境等を把握し、その子の発達の特性や発達の課題を理解して指導をしている。</p> <p>(2)子供が主体的に周囲の人や物に働きかけることができるよう、環境の構成を工夫している。</p> <p>(3)子供一人一人が自分の思いや考えを出していく中で、互いの違いを認め合い、尊重し合う心が育つような援助をしている。</p> <p>(4)特別な配慮が必要な子供（障害のある子供を含む）の教育・保育に当たっては、ほかの子供との生活を通して共に成長できるように援助している。</p>	済・未
5	<p>行事等を通して、園生活に変化や潤いを与えられるよう工夫している。</p> <p>(1)季節の行事や誕生会等を通して、子供が季節感や文化などを体感できるようにしている。</p> <p>(2)子供が行事に期待感を持ち、主体的に取り組んで、喜びや感動、達成感が味わえるような配慮をしている。</p> <p>(3)園の行事に地域の人々の参加を呼び掛けたり、地域の行事に参加したりする等、子供が地域の人々と交流し、社会に対する興味や関心を持つような機会を作っている。</p>	済・未
<p>(コメント)</p> <p>公開保育参加者の発言から、牛津ルーテルこども園の保育者が適切な援助を行ったり、子どもが自分の力でいろいろな活動に取り組めるように配慮したりしていることが確認された。また、異年齢での保育のかかわりや、配慮を必要とする子どもへの関りもチーム保育の保育者と連携や役割分担ができていて、保育実践が適切に行われていることが確認できた。</p>		

5) 記録・振り返り

	調査項目	確認結果
1	個人の記録や集団の記録、エピソード記録等、子供の状態と園の方針や仕組み等の状況に応じて、必要な記録を適切に行っている。	済・未
2	記録を客観的に振り返ったり、保育者間で話し合ったりして、次の教育・保育の計画に活かしている。	済・未
3	適宜、保育者間のカンファレンスが行われ、実践の振り返りと適切な評価の機会がある。	済・未
4	情報共有ができる同僚性の豊かな保育者集団の中で、園としての評価結果の共有や課題発見が行われ、計画・実践に適切に反映されている。	済・未
5	園内で共有された子供の育ちや実践の過程、または評価結果について、保護者や地域社会等の園外に向けて適切に発信し、共有していく努力をしている。	済・未
<p>(コメント)</p> <p>子どもたちの記録を詳細にまとめていることが確認でき、記録を継続・共有する仕組みが有効に働いていることが確認された。詳細な記録については、教職員が話し合い、記録の時間を作り出すなど、負担がかからないようにも工夫されていた。日々の振り返りから縦割り保育の特性を理解し実践していることが確認できた。</p>		

④家庭・地域連携

	調査項目	確認結果
1	小学校教育との円滑な接続のために教育・保育の内容を工夫している。	済・未
2	子供の成長発達について保護者との連携を行い、保護者が安心して子育てをすることができるよう支援を行っている。	済・未
3	自己評価・関係者評価に取り組み、その結果を保護者や地域に伝える等、園全体で教育・保育の質の向上のために改善がなされるよう手立てを行っている。	済・未
4	子育て親育ちの場として、地域における子育ての支援に関するセンター的役割を果たしている。	済・未
5	教育時間終了後等に行われる保育は、子供の生活にふさわしい指導計画の下に行っている。	済・未
6	地域の資源を積極的に活用し子供が豊かな生活体験を得ることができるような機会を設けている。	済・未
<p>(コメント)</p> <p>地域社会のつながりや幼小連携も行っていることが確認できた。自己評価・学校関係者評価にも取り組み、第三者評価も園長先生のリーダーシップのもと教職員も積極的に取り組んでいる。コロナ禍になり回数は減っているが、地域の幼児教育の拠点として、子育て支援事業も実施されていることが確認できた。子育てについて気軽に話し合うことができ、幼児教育機関として地域の保護者との連携や交流の場が確保されていることも確認ができた。</p>		

公開保育コーディネーターからの報告

STEP1 では、要覧や入園のしおり、教育課程などの提示を受けた上で、園長・副園長・主幹教諭からのヒアリングを実施した。そこで印象的だったのは、環境の整備においても、保育内容の改善においても、保育者の質向上においても、常に現状に甘んじてはいけない、という園長の強い意欲とその実践が伝わってきたことである。

具体的には、担当制と流れる日課を保育のベースに取り入れて子どもたち一人ひとりを尊重する保育形態に移行しているが、年に2回は外部講師を招聘して保育実践の振り返りと向上を目指している。また、遊びや活動の環境を整えるためにも適宜、外部講師の意見を仰ぐようにしている、とのことだった。そうした取り組みにより「今のままの園舎（旧園舎）では、より良い環境を構築することが難しい」との判断をするに至り、新園舎（現園舎）への移転・新築へと大きく舵をきるようにした（2019年移転）、とのことだった。

クラス数は、未満児3クラス、以上児3クラスだが、以上児クラスは縦割り（3,4,5歳児）により編成されている。縦割り保育を実施して4年が経過している。時間や期限が限られた縦割りの活動ではなく、縦割りの保育（生活）が日常となっている園は少数であると思われるが、縦割りならでは環境構成や保育方法などの課題に向き合いながら、それを克服、改善するために園内研修の充実を図っている。「縦割りはやればやるほど改善点があることに気付かされる」とは園長の言葉だったが、園長以下、保育者全員が同じ方向を向いて、保育の実践を振り返り、点検し、研修を通して学びを深め、そして実践に向かう、という姿勢がとてもよく伝わってきた。

STEP2 での現場の保育者との事前研修においては、自覚している自園の良さと同時に、現場レベルでの困難さや課題が様々挙げられていた。しかし、そこで感心させられたのは、一人ひとりの保育者の発言がしっかりとっていて、保育者間の意見の交換が非常に活発に行われていることだった。コーディネーターからの問いかけに対しても、どの保育者もしっかりと自らの意見を述べる事ができていた。これは、STEP1 のヒアリングでも園長から聞いていたことではあったが、日ごとから園内研修を実施して、保育者間で話し合いを重ねていることによるものと確かに感じる事ができた。

実際に、田の字ワークを用いて自園の良さや課題を整理してみると、良さと課題が表裏一体になっている点が多くあることに気づく事ができた。例えば、子ども主体の保育を志向する良さがある反面、課題の取り組み方において学ぶべきことが多い、発達に課題のある子どもへの対応が難しい、など。縦割り保育については、やはり様々にメリットと（現時点での）デメリット、課題が挙げられていた。また、環境面においても、遊具や玩具の種類や数が充実している反面、それらの補修や清掃に十分な時間が取りにくいなどの気づきが挙げられていた。未満児クラスにおいては乳幼児期の発達についての学びを深める必要があるとの意見も出ていた。園レベル、個人レベルでの課題と感じる意見も数多く出たが、『チームワーク』、『なんでも話し合える関係性』、『共に子どもたちの成長を喜び合う』といった意見に表れているように職員間の雰囲気の良い、そして『変化を恐れない』、『振り返りと反省を大事に』といった現場の先生たちの向上心の高さがあれば、今回の公開保育や今後の研修などを通して様々な課題も克服していくのだろう、という期待を持てるSTEP2であった。

STEP4～5 では、公開保育当日が土曜日であったために、通常よりも大幅に登園する子どもが少なかった。そのことが用意した『問い』に対して、期待するようなフィードバックが得られるかどうか懸念があったが、ガイダンスでもその旨の説明があり、ありのままの姿を見つめてもらった上で、率直な意見を多く得られたように思う。私がファシリテーターとして入ったカンファレンスでも活発に質疑も行われていた。特に牛津ルーテルこども園ならではの育児担当制と流れる日課や、縦割り保育に関する意見が多く出されていた。参加者はほとんどが各園の主任・主幹クラスであったが、だからこそ自園との違いが際立つ点において、課題というよりは素朴な疑問のような意見が多かったように思う。しかし、そうした質問に丁寧に応答していく過程において、改めて牛津ルーテルこども園の

保育者としての課題や、自園の保育の良さに気づくことができたのではないだろうか。このカンファレンスにおいても自園の保育に対する理解の深さや、疑問や質問に真摯に対応する保育者の姿は非常に好感の持てるものだった。多くの参加者からは優れた環境設定であったり、子どもの主体性を大切にする意志が感じられる保育者の関わり方などに、共感と称賛の意見が出ていた。『課業』や『環境認識』という言葉そのものに馴染みがない参加者も多かった。保育者からの説明があれば理解もできたが、冊子などに言葉の説明があってもよかったかと思う。

STEP5 の事後研修まで終了して感じたことは、**ECEQ®**の公開保育への取組みを通して、牛津ルーテルこども園の魅力、強みがさらに強化されたのではないか、ということである。それは園の理念や目指すべき保育の方向性が、園長以下、副園長、主幹教諭、そして現場の全ての保育者に見事に透徹されているところにある。そのありようを **STEP2** において『ワンチーム』と評した保育者もいたが、まさに共通の価値観に基づいて、一つになってより良い保育を模索する体制が整えられたと言えるだろう。

Ⅱ. ヒアリング等・書面等による評価

< B 運営 >

① 運営体制

	調査項目	確認結果	確認・評価視点等
1	教育・保育に対する理念や方針が明確である。	済・未	<ul style="list-style-type: none"> ・教育・保育に対する理念・方針を明文化し、教職員はもちろん保護者、地域にも広く周知している。 ・会計事務については各種帳票も適切に管理されている。 ・緊急時にも柔軟に対応できるように十分な人材を確保し、また継続的に勤務できるような体制がとられている。 ・外部講師を招いて直接指導を受けるなど、教育・保育の質向上のための取り組みを行っている。
2	コンプライアンスを遵守し、管理体制を構築している。	済・未	
3	会計事務を適切に行っている。	済・未	
4	人材確保や継続して勤務できる職場環境である。	済・未	
5	教育及び保育の質を向上させるための運営体制が整備されている。	済・未	
6	適切な教育環境を維持するために必要な財源が確保されている。	済・未	
7	学校評価を実施している。	済・未	
8	適正な法人運営を行っている。	済・未	
<p>(コメント)</p> <p>理事長・園長を中心に、健全な学校法人の運営がなされている。新園舎の建築、認定こども園への移行後も、安定した財源の確保、園児数の維持がなされ、地域からの信頼も厚いように見受けられる。</p>			

②安全管理

	調査項目	確認結果	確認・評価視点等
1	自然災害や事故等を想定した危機管理マニュアルを策定し、訓練を実施している。	済・未	<ul style="list-style-type: none"> 各種マニュアルが整備され、緊急時の対応について、廊下に掲示するなど、保護者にも周知している。 消防訓練等も定期的に、且つ様々な想定のもとに実施されている。 園医、園歯科医等と連携し園児の健康管理に努めている。
2	教育・保育における危機管理マニュアルを定期的に見直している。	済・未	
3	園舎、遊具及び車両の安全点検や環境のチェックを定期的に行い、必要に応じ改善を行っている。	済・未	
4	園児の衛生・健康管理に努めている。	済・未	
<p>(コメント)</p> <p>安全管理について、各種マニュアルが整備され、教職員、保護者にも周知徹底されている。地域の特性に応じて、様々な想定をしながら毎月の訓練もなされ、非常時への備えがなされている。</p>			

③子育ての支援

	調査項目	確認結果	確認・評価視点等
1	学び発達の連続性を確保するために、小学校と連携をはかり、地域の関係機関や団体と交流し連携をはかっている。	済・未	<ul style="list-style-type: none"> 小学校との連携をはかりスムーズな移行ができるよう努めている。 随時、保護者に子どもの成長を伝え、その成長を共に喜ぶ機会を作っている。
2	園児の成長を通じて、保護者の親育ちを支援する取り組みを行っている。	済・未	
<p>(コメント)</p> <p>子育て支援のための部屋も整備され、必要とする親子が気軽に利用できるよう配慮されている。定期的な子育て支援の集いや、教育相談に応じて、地域の乳幼児教育センターとしての役割を担っている。</p>			